

## 「イエスの洗礼」（マタイ三・一二～一七）

### 1 告白としての洗礼

今日の聖書箇所はイエスの洗礼バプテスマをあつかっているところです。四つの福音書全部にこれが記されています。詳しくあったり、短かったり、ですから少しの違いはあるのですが、すべてに伝えられているということは、これが大事なことだということを意味しています。

イエスの洗礼が記されている前後関係も四つの福音書とも基本的に同じです。バプテスマのヨハネがヨルダンの荒野に現れます。それと関連してイエスの洗礼がなされます。洗礼の後にイエスは信仰の試練に遭い、それに打ち勝ってはじめて、ガリラヤで、メシアの宣教活動を開始します。

したがって整理すれば二つのことがいえると思います。一つは、バプテスマのヨハネの活動と関連して、イエスも洗礼を受けられたということです。もう一つは、洗礼はイエスのメシアとして働きの備えであり、その準備としてもっとも大切なものであったということです。逆の言い方をすれば、洗礼を受けられることなしにイエスはメシアとしての活動を始められることはなかった。

後で少し詳しく申し上げますが、イエスの洗礼は私どもの洗礼とは違う特別の意味をもっていました。しかし差し当たって、イエスが洗礼をもって新しい人生を開始したという点では私どもと同じです。イエスは三〇歳、第二の、真の人生というように言い方をしてもいいと思いますが、洗礼をもって新しい人生を始められた。それゆえ私どもそれにならって洗礼をもって新しい人生を始めるところをしようといっているのです。

じつさい、洗礼バプテスマという形で、信仰生活の始まりがこれほど大切にされている宗教はほかにないのではないかと思います。他の宗教の事情はまったく知りませんが、少なくとも姉妹宗教であるユダヤ教でも、あるいはイスラム教でも、おそらく始まりはもっと簡単だと思えます。イスラム教は入信のさい何か特別の文言をくり返し唱えることしか求められていないようですし、ユダヤ教の場合は、基本的には先祖代々ユダヤ人の宗教で、改宗者のための洗礼はありますが、それはきよめのためであり、くり返される沐浴の一種です。一度切りのものではない。その点でキリスト教と大きく違ってきます。

ただそうした私ども、洗礼バプテスマを大切に考えている私どもですが、洗礼を受けているから自分は大丈夫、洗礼を受けていないからあの人は救われないと、そんなふうに自分に都合良く洗礼を解釈する、あるいは利用するということであれば、それは正しくないといわなければならぬと思います。私どもを救うのはイエス・キリストその方です。神です。御子イエスにおいてなされた神の救いは万人に差し出されています。それを洗礼を受けているか受けていないかで分けてしまうというのは神の前で正しいとは思いません。

それなら洗礼は救われるのに不必要なのかというと、決してそうではない。こう考  
えたらいいと思います。

すべての人に差し出されている救い、このすべての人の中に私も入っている、その  
ことを知ったとき、この恵みと選びを知ったとき、私どもはみなイエスと一緒に新し  
い歩みをしようとするのではないでしょうか。そのときどうして洗礼を受けずにおら  
れるでしょうか。イエスも受けられた洗礼を私も受けて、そして一緒に歩もうとしな  
いことがあるでしょうか。ですから私どもが志願し、私どもが受ける洗礼はそうした  
私どもの信仰を公に表すことであり、イエスに従って歩もうという志を公に表す、信  
仰の告白なのです。

## 2 イエスの洗礼

イエスの洗礼はバプテスマのヨハネの活動との関連でなされた、イエスは洗礼をも  
ってメシアとしての歩みを始められた、宣教を開始されたとはじめに申しました。そ  
の事情を今日の聖書からもう少し見てみたいと思います。

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところに来られた。彼  
から洗バプテスマ礼を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせよう  
として言った。「わたしこそ、あなたから洗バプテスマ礼を受けるべきなのに、あなたが、  
わたしのところへ来られたのですか」(一三〜一四節)。

ここに書いてあるようなやりとりがイエスが洗礼をお受けになられるときにあつ  
た。洗礼を受けようとしてガリラヤから来たイエスを、ヨハネは思いとどまらせよう  
としたのです。

ヨハネがおこなっていたのは「水の洗礼」です。それは人々を悔い改めに導くため  
のもので、あるいは悔い改めの意思表示です。これに対して、ヨハネが預言した「後  
から来る方」、すなわちメシアは「聖霊と火」(聖霊の洗礼という言い方もあり)で  
洗礼を授ける方です(一一〜一二節)。この意味は、人を本当に神へと向き変えさせ  
る洗礼です。向きを変えようという本人の気持ちを表すしとしての洗礼ではありません。

もしイエスがヨハネのいう「後から来る方」であるなら、悔い改めの洗礼、水の洗  
礼をイエスにほどこす必要はないということになります。反対にヨハネほうが、なる  
ほど生まれるときから霊に満ちていた(ルカ一・一五)人であったとしても、人間で  
あることに変わりはないのであって、彼のほうが、洗礼を、この場合は水による洗礼  
ではなく、聖霊による洗礼ですが、洗礼によって生まれ変わらせていたただかなくては  
ならない。イエスに洗礼を願い出なければならぬ。メシアであるあなたがわたしの  
ところに来られる、それは逆です。それがバプテスマのヨハネの偽らざる思いであり  
ました。イエスはこう答えておられます。

しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」。そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした」（一五節）。

こうしてイエスはヨハネから洗礼を受けます。この洗礼は、悔い改めにいたるための洗礼、水の洗礼です。このことはしかし、考えればじつは驚くべきことだったので。というのも、イエスはメシアとして、罪のない方であり、なぜ悔い改めの水の洗礼を受けなければならないのかという問題がふくまれるからです。後の教会はその問題にぶつかった。イエスはヨハネの洗礼を受けた、それは事実です、でもどうしてなのか、という問題です。

それに対して二つのことを私は申し上げてみたいと思います。

一つは、このようにしてイエスは一人のイスラエル人として、他のすべてのイスラエル人とともにその歩みを開始したのだということことです。

今日の箇所のはじめ一三節に「ガリラヤから」というところがあります。口語訳ではガリラヤを「出て」という訳になっており、日本語として印象深くおぼえています。ガリラヤ地方、そのナザレはイエスが三〇年を過ごしたところですが。家族とともに育ち、人々と付き合い、働いてきたところですが。そこでずっと暮らしていけば、それはそれできつと幸せな一生を送れたはずですが。そうした中であのバプテスマのヨハネのメッセージが響きわたった。「悔い改めよ、天（の）国は近づいた」（三・二）。われわれは罪を告白し、神の国の到来に備えなければならぬ。それはヨハネを通して語られた神の言葉でした。イエスはそれに従って、ガリラヤを「出た」。そうした神の呼びかけに従順と献身をもって従った。悔い改めよというような呼びかけに人は簡単には従わない。そのことを考えれば、このイエスの姿の中に、かえってイエスは罪なきお方であったことが現れているといってもよいように思います。

二つ目は、一般のイスラエル人、あるいは私どもについては言えないこと、イエスの洗礼に特別なことです。ルカによる福音書にイエスご自身が、十字架の苦しみを指して「わたしには受けねばならない洗礼バプテスマがある」（二二・五〇）と言っているところがあります。一人のイスラエル人としての、ヨハネの洗礼によって始められたイエスの生涯は十字架へ道行き以外のものではありませんでした。自分の罪を背負い、それをあがなうための苦しみの道ではない。イスラエルの人々の、そして私どもの罪を背負い、それをあがなう歩みです。イエスがバプテスマのヨハネの洗礼を受けたということにはへりくだりがありました。神の子が人となった。私どもの一人となつてくださった、私どもの罪を、自分の罪として担おうとされた。神なき私どもと同じところに立って下さった、その身を置いて下さった。罪人の一人と数えられることをよしとされたということです（マルコ一五・二八、口語訳）。その道をまっとうすることによって人を神と和解させる務めをなしとげてくださったのです。そうしたことがみなイエスの洗礼にふくまれていました。

### 3 洗礼から生きる

イエスの洗礼は、いま申し上げたような点で私どもの洗礼とは違っていました。救い主としてのイエスの歩みはヨハネによる洗礼から始まって、十字架の死と復活によって完成にもたらされたのです。

今日、はじめに、信仰があればよいのであって、洗礼は不必要なのか、受けても受けなくてもよいのか、という問題に少しふれました。恵みを知ったとき、イエスも洗礼を受けて歩み始めたように、私どもも洗礼を受けて歩みたいと願い、歩まざるをえなくなるというようなことを申し上げました。

しかしイエスの洗礼の意味を知ったいまは、もう少し積極的な言い方をしなければならぬと思います。それには使徒パウロの言葉が参考になります。

わたしたちは洗バプテスマ礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」(ローマ六・四)。

洗礼は私どもをイエス・キリストと関わるのです。私どもは教会の水による洗礼によってイエス・キリストに結ばれる。キリストとともに古い自分に死にイエス・キリストと共に新しい命に生きるのです。洗礼は要らないということは、キリストとの関わりは要らないということと同じです。

ルターの洗礼についての有名な説教があります。以前もその一部に少し触れたことがあります。彼は洗礼をあらわすドイツ語が「深い」という意味に由来することを取り上げ、洗礼とは、古い自分と私の罪が神の恵みによって水に深く沈められ、完全に溺死させられてしまうことを意味するといっています。そして罪の溺死は私どもが生きているかぎり続くといっています。

生涯つづく。一面では私もその通りだと思えます。しかし同時にイエス・キリストによって私どもの罪はみなすで、あがなわれたのです。それゆえ私どもの洗礼は一回でいいのです。私どもはなおこの世にあります。地上を歩みます。それゆえ罪にまわりつかれています。しかしそれはイエス・キリストによってすでに解決された、それを信じ、受け入れて、私どもは洗礼から生きる。洗礼から生きるのが私どもの人生です。あるいはたえずそこに帰って、その原点から生きる、その原点に立ち帰る一つの道は聖餐にあずかることです。いずれにせよ私どもはすでに洗礼を受けている。キリストと結びつけられた、そこに立って歩みたい。ここにはこれから洗礼を受けたいと思っている方も、いらっしやると思えます。今日は、そうした方々に、洗礼から生きる道を歩まれることをぜひおすすめて話を終わりたいと思います。洗礼によってあらためてキリストと共に、この方に従って歩んでまいりましょう。

(二〇一九年一月一三日)